

江戸川乱歩の世界

屋根裏の散歩者

その他

目次

江戸川乱歩の世界

D坂の殺人事件

- 一、 事件の発生
- 二、 事件現場
- 三、 明智の部屋
- 四、 私の推理
- 五、 明智の推理
- 六、 結び
- 七、 心理試験

屋根裏の散歩者

- 一、 素人探偵明智小五郎
- 二、 屋根裏の散歩
- 三、 天井裏からの隙見すき
- 四、 覗きとは
- 五、 ツルの恩返し
- 六、 完全犯罪への誘惑
- 七、 犯罪の遂行
- 八、 明智の推理
- 九、 推理の決め手
- 十、 結び

※ 参考文献

江戸川乱歩の世界
D坂の殺人事件

D坂の殺人事件

例えば、江戸川乱歩の『D坂の殺人事件』という「作品」は、世間一般には非常に有名な作品ではあるが、その「内容」は、「本」（書物）で読む限りは、映画、その他の「映像」などに比べると、意外と単調シンプルという感じを受けるかも知れない。が、ここでは、できるだけ「本文」に寄り添いながら、その「魅力」を少しばかり考察してみたいと思う。

*

*

まず、本文の「冒頭」は、次のようなものである。つまり、「……それは九月の初旬のある蒸し暑い晩のことであった。私は、D坂の大通りの中ほどにある、白梅軒はくばげんという、行きつけの喫茶店で、冷しひやコーヒを啜すすっていた。当時、私は、学校を出たばかりで、まだこれという職業もなく、下宿にゴロゴロして本でも読んでいるか、それに飽きると、あてもなく散歩に出るのが、毎日の日課だった。白梅軒はくばげんというのは、下宿屋から近くもあり、どこへ散歩するにも必ずその前を通るような位置にあつたとともに、私という男は悪い癖で、喫茶店に入るとどうも長尻ながじりになり、安いコーヒを二杯も三杯もお代わりして、一時間も二時間もじっとしているのであつた」という書き出しになっている。

一、事件の発生

さて、「……私はその晩も、例によつて、一杯の冷しコーヒを十分もかかつて飲みながら、いつもの往来に面したテーブルに陣取つて、ぼんやり窓の外をながめていた。大通りを越して白梅軒のちようど真向こうに、一軒の古本屋がある。実は、私は先ほどから、その店先をながめていたのだ。みすばらしい場末すえの古本屋であるが、私にはちよつと特別な興味があつた。というのは、私が近頃この白梅軒で知り合つた、名前は明智小五郎というのだが、いかにも変り者で、それが頭がよさそうで、探偵小説好きなのだが、その男の幼馴染おきななじみの女が、この古本屋の女房になつていて、彼から聞いたのである。しかも、なかなかの美人で、なんとなく官能的に男をひきつけるところがあるという。彼女は、夜はいつも店番みせをしているのだが、今日は、なかなか出てこない。いいかげんあきらめかけた時に、ふと、店と奥の間との境に閉めてある障子の戸こうし（格子）が、ピツシヤリしまるのを見た」とある。それを不思議に思うのだが、それは、蒸し暑い晩で、しかも、万引きされやすい商売であり、たとえ店に出なくても、当然どこかのすき間から店の様子は、見張つていなければならぬのに、すべてを閉めきつてしまうのは、何かおかしいと思うのである。

しかも、その喫茶店のウェイトレスたちの噂うわさでは、「……古本屋のおかみさんは、あんなにきれいな人だけれど、はだかになると、からだじゅう傷だらけで、たたかれたり抓つかられたりした痕きずに違ちがいないわ。別に夫婦仲が悪くもないようなのに、おかしいわねえ」とある。すると、別の女性も、「……あの並びのソバ屋の旭屋のあかみさんだつて、よく傷をしてるわ。あれもどうも叩たたかれた傷に違ちがいないわ」と言うのであつた。これはもちろん、読者に「或る事」を予感や期待などをさせながら、まさに「話」（ストーリー）を展開し

て行くという手法であり、一方、作品の「私」は、それを深く気に留めないで、ただ亭主が邪険なのだろうぐらいに考え込んでいて、あとになってそれがわかるという推移なのである。そして、格子を閉めたのは、ちょうど八時頃であり、それから三十分ぐらいじっと見ていると、たまたま通りに明智小五郎が通って、やがて店へと入って来るのであった。

そして、その明智小五郎との間で私は、例えば、「……絶対に発見されない犯罪というものは不可能でしょうか。僕はぜひぶん可能性があると思うのですがね」と言うと、それに対して、明智小五郎は、「……いや、僕はそうは思いませんよ。実際問題としてならともかく、理論的に言って、探偵のできない（謎の解けない）犯罪なんてありませんよ。ただ、現在の警察に（それだけの）偉い探偵がいなくてもいいですよ」と言うのであった。そして、そのような話をしながら、二人は、ずっと古本屋の店先の方を見ていて、二人とも気づくのであるが、それは、まさに「本泥棒」（つまり「万引き」）であり、「……君が来てからまだ三十分にもならないのに、三十分に四人も、おかしいですよ。僕は、君の来る前からあすこを見ていたが、一時間ほど前にね、あの障子があるでしょう。あれの格子のようになつたところが、しまるのを見たんですよ」と言うのであった。

そこで、二人は、何かあったかも知れないと思って、喫茶店を出て、古本屋の店の番をする「畳敷き」のところまで行って、大声で叫んでも何の返事も無い。そこで、障子を少し開けて、奥の間を覗いてみると、電灯は消えていて、どうやら人間らしいものが、部屋の隅に倒れている様子であり、そこで、二人ともドカドカと奥の間へと上がり込み、明智小五郎が電灯のスイッチをひねる（これは、昔の裸電球のソケットのスイッチをひねる）と、二人は、同時に「アッ」と驚くが、それは、明るくなった部屋の片隅に、女の死体（古本屋の女房）が横たわっていたからである。しかも、それは、まさに「絞殺」（首をしめられ）て、すでに死んでいる状態であり、すぐに警察へ知らせなきゃと、明智小五郎は、公衆電話をかけに外へと出て行くという展開になるのである。

二、事件現場

さて、その「部屋」は、ひと間きりの六畳で、奥の方は、右一間は幅の狭い縁側を隔てて、二坪ばかりの庭と便所があり、板塀になつている。つまり、店の中からは、「店番の畳敷き↓障子↓六畳の部屋↓狭い縁側↓二坪の中庭と便所↓板塀↓裏の路地」という配置になつている。そして、夏のこと、あけっぱなしで、すっかり見通せる。——左半間はひらき戸で、その奥に二畳敷きほどの板の間があり、裏口に接して狭い流しが見え、裏口の腰高障子は閉まつている。また、向かって右側は、四枚の襖になつていて、中は二階への階段と物入れ場になつている、ごくありふれた安長屋の間取りとある。死骸は、左側の壁寄り、店の間の方を頭にして倒れている。女は、荒い中形模様の浴衣を着て、ほとんど仰向きに倒れている。しかし、着物が膝の上の方までまくれて、腿がむき出しになつているくらいで、別に抵抗した様子はない。首のところは、どうやら、締められた痕が紫になつているらしい。そして、店の前は、まさに「大通り」（D坂）で、人の往来は絶えないとなつている。そして、明智が「すぐ来るそうです」と言いながら、帰って来る。

やがて、一人の制服の警官が背広の男を連れてやって来る。制服の方は、K警察署の司法主任であり、もう一人は、同じ署に属する警察医である。そして、その司法主任に、最

初からの事情を大筋説明し、それに加えて、「……この障子の格子が締まったのは、恐らく、八時頃だったと思います。その時はたしか中にも電灯がついていました。ですから、少なくとも八時頃には、誰か生きた人間がこの部屋にもいたことは明らかです」と話すと、司法主任は、それを手帳に書き留めているあいだ、警察医は一応死体の検診を済ませていた。そして、その警察医は、「……絞殺ですね。手でやられたのです。それから、この出血しているのは、爪が当たった箇所です。右手でやったものです。恐らく、死後一時間以上はたっていないでしょう」と言う。そして、司法主任は、主人はどこへ行っているのかねと聞くと、二人は何も知らず、そこで隣りの時計屋の主人を明智が連れてきて聞くと、「……この主人は、毎晩、上野の広小路あたりで古本の夜店を出していて、いつも十二時頃でなきや帰って来ません」と言う。そこで、一時間ばかり前に、何か物音を聞かなかったかと聞かれ、別段これという物音は聞かなかったと言う。また、人だかりができた中にいた、一方の隣りの足袋屋のおかみさんも、何も物音は聞かなかったと言うのであった。

さて、「大通り」(D坂)から見て、古本屋の右隣りは、時計屋であり、その隣りは、菓子屋である。一方、左隣りは、足袋屋であり、その隣りは、ソバ屋という並びになっている。やがて、表に自動車が停まり、警察からの通報で駆けつけた検事局の連中と、同時に到着したK警察署長、及び当時名探偵という噂の高かった小林刑事などの一行がドヤドヤと入ってきた。そして、先着の司法主任から一通りのことを聞き、特に小林刑事は、現場の様子や死体を念入りに調べた。そして、死体からだにはたくさんなまきずの生傷があることを知るのである。また、裏の路地は、日当たりが悪く、ぬかるみで、下駄の跡が無数に付いていたとともに、その路地の先の角むどに店を出している菓子屋(アイスクリーム屋)の主人に聞いても、この路地に出入したものは誰もいなかったと言う。つまり、犯人の足跡も、また、遺留品も何もなく、唯一の手がかりは、電球のスイッチの「指紋」だけであるが、それは、明智の指紋以外、誰の指紋も出てこなかった。もう一つは、事件のあった八時前後に店の中にいた二人の工業学校の学生は、なにやら奥で物音がしたので、その障子の方を見ると、一人は、「格子」越しに、その格子もすぐに締まったのだが、黒っぽい服を着た男が一人ちらつと見えたと言ひ、もう一人の学生も、「格子」越しに、逆に、白っぽい服を着た男をちよつと見たと言うのであった。この「矛盾」に対しては、明智小五郎は、最終的には、人間の「記憶」などは、あてにならないものだという判断を下すのである。また、古本屋の主人が駆けつけるが、彼は、「……これ(妻)に限って人様のうらみ怨みを受けるようなものではございません」と言ひ、また、多くの「生傷」なまきずについては、主人は非常に躊躇ちゆうちゆうしながらも、自分がつけたと言うのであった。

三、明智の部屋

さて、事件から十日が過ぎて、これという進展もなく、私は、煙草屋の二階に間借りをしているという、明智小五郎の「部屋」を初めて訪ねてみるのであった。それは、まず、店のおかみさんが、下から二階にいる明智に向かって名前を呼ぶと、「オー」と返事があり、下に降りてきて、驚いた顔で、「やあ、上がりなさい」と言うので、彼のあとから二階に上がり、そして、彼の部屋へ一歩足を踏み込んだ時、私は、その部屋のあまりの異様に、アツと驚いてしまったとある。——それは、四畳半の座敷がすべて書物で埋まって

いたからである。まん中のところに少し畳が見えるだけで、あとは本の山である。四方の壁や襖ふすまに沿って、下の方はほとんど部屋いっぱいには本だらけであり、天井近くまで四方から書物の土手がせまっている。ほかの家具などは何も無い。二人が座るところさえないほどである。仕方なく、私は、やわらかそうな本の上にすわり、二人は、例の「事件」について、その「推理」を話し始めることになるが、その前に、明智小五郎の「人物像」の描写があるので、それを参考までに少し書き留めておきたいと思う。

まず、彼は、これという職業を持たない一種の「遊民」であり、自分は、「人間の研究」をしていると言っているが、彼は、犯罪や探偵などになみなみならぬ興味と、おそるべき豊富な知識を持ち合わせていたのである。また、年は、私と同じくらいの二十五歳ぐらいであり、どちらかと言えば、痩やせた方で、歩く時に変に肩を振る癖がある。それは、決して豪快流のそれではなく、講師の「神田伯竜はくりゆう」（若い時の写真ウエブ参照）に似たような歩き方であり、しかも、その「顔つきから声こゑ音」まで、彼にそっくりだとある。いわゆる好男子ではないが、どことなく愛嬌あいせうのある、最も天才的な顔を想像するがよいとある。ただ、明智の方は、髪の毛がもっと長く延びて、モジャモジャともつれ合っていて、人と話している間にも、指でそのモジャモジャの毛を引っ掻かき回すのが癖だとある。服装なども、一行に構かまわぬ方らしく、いつも木綿の着物によれよれの兵児帯へこおびを締めているという。これは、もう有名な「探偵金田一耕助きんたいちこうすけ」に極似の「特徴」になるかと思う。というのも、過去のすべての「映画やドラマその他」のなかで、明智小五郎がモジャモジャ頭でよれよれの木綿の着物をいつも着ているという設定は、ほとんど皆無ではないかと思う。しかし、これが、江戸川乱歩という作家が描く「若い時の明智小五郎の人物像」になるのである。

四、私の推理

さて、まだ若い明智の「部屋」を訪ねて来た「私」という人物は、次のように話し始めるのであった。それは、実は、今日、ここへ来たのは、例の「事件」について、その後、いろいろ考えてみて、もちろん、考えるだけではなく、探偵のように実地の取調べなども行なってみて、一つの「結論」に達したので、それを君に報告しようと思つて来たのだと言う。しかも、「……僕が到達した結論というのは、どんなものだと思う。それを警察へ訴える前に、君のところへ話しに来たのは、何のためだと思う」と言うのであった。

まず、主人公（私）の最初の「推理」であるが、それは、店の中にいた二人の「学生の証言」のなかで、一人は、黒っぽい服を着ていたと言い、もう一人は、白っぽい服を着ていたという「矛盾した証言」に対して、それは、いくら人間の眼が不確かだと言っても、正反対の「黒と白」とを間違えるのは変だと考える。そこで、むしろ犯人は、白と黒とのだんだらの着物を着ていて、学生の二人が「障子の格子こうし」のすき間越しに中をちらつと見た時に、一方の場合は、格子のすき間と着物の白地の部分とが一致して見える位置にいて、もう一人の場合は、格子のすき間と黒地の部分とが一致して見える位置にいたからと推理する。そして、これは珍しい偶然かも知れないが、決して不可能ではなく、この場合、こう考えるほかに方法がないと言う。もちろん、明智小五郎は、ただ黙って聞いている。

次に、電灯のスイッチに「明智の指紋」しか残っていなかったのは、一体、どういうことかの「推理」であるが、それは、次のようなものである。まず、警察の考え方では、多

分、明智の指紋が犯人の指紋を隠してしまったのだらうというものである。ところが、主人公（私）は、そうではないという考え方に立つのである。そこで、すずり硯を借りて、一つの実験をして見せるのだが、それは、右手の親指に薄く墨をつけて、半紙の上に一つの指紋を押し、乾いてから、もう一度、方向を変えて重ねて親指を押すと、そこには互いに交錯した「二重の指紋」がハッキリとあらわれる。つまり、「前の指紋」（犯人の指紋）を「後の指紋」（明智の指紋）で完全に消すことなど出来ないのである。それゆえ、犯人が最後に電灯を消したとすれば、必ず、犯人の「指紋」は残っていないなければならないという結論である。しかし、これは、犯人が手袋その他をはめている場合、また、付いた指紋を何かで拭き取ったという場合、その他などが全く考慮されていない不十分な「推理」であり、その結果として、次のような間違った「結論」を出すことになるのである。

それは、まず、その男は、太い棒縞ぼうじまの着物を着て、恐らく、死んだ女の幼馴染みおきななじで、失恋の恨みなどがあり、主人の留守を知っていて、その留守を襲ったのである。また、抵抗した跡あとがないのは、まさに二人は「顔見知り」であり、しかも、死体の発見を遅らせるために電灯を消したのである。——一方、犯人の失敗は、一つは、例の「障子の格子こうし」の開いているのを知らずに、慌てて閉めたが、二人の学生に偶然にも見られてしまったこと。もう一つは、電灯のスイッチに指紋を付けてしまったこと。それに気づいたが、現場に戻るわけにも行かず、そこで、自分が殺人事件の「発見者」になることで、電灯に自分の指紋がついているをごまかそうとしたということである。

この「推理」のなかで、唯一「優れている」と思えるのは、犯人が現場に何らかの「証拠物」その他などを残した時に、再び、現場に戻ることはできにくく、そこで、自分が犯罪の「発見者」となると、その「証拠物」その他などを「隠す」（或いは「消す」という「考え方」である。そして、この「推理」は、当然のことながら、犯人は、まさに「明智小五郎」である、と見ているのである。——さて、そもそも、なぜ、主人公（私）は、わざわざ明智の所にやって来たのか？ それは、自分が到達した「結論」をぜひとも聞いてもらいたいためであり、そして、もう一つは、警察に訴える前に、明智にいわば「自首」を勧めに来たということでもあるのである。それゆえ、主人公（私）は、話をしながら、明智の「顔の表情」を密かに注意して見ていたが、何の変化もなく、相変わらずの「ポーカーフェイス」を保っている。そこで、最後の「切り札」的なものとして、犯人は、まさに「……一体、どこから入り、そして、どこから逃げたのか」という最大の「難題」に対して、次のように「推理」するのである。

それは、古本屋の二つ隣りに「ソバ屋」があるが、その「……店の中は、土間つづきで、裏木戸まで行けるようになっていて。というのも、その裏木戸のすぐそばに便所があるからである。つまり、便所を借りるような感じで店に入り、そして、その便所へ行くような格好で、土間を歩いて裏木戸の方へと行き、そして、その裏口から外へと出て行つては、また、裏口へと戻つて来た」という推理である。——この「推理」は、基本的には、間違つてはいない。確かに、犯人は、ソバ屋の「裏口」から出て行つては、古本屋の「裏口」から古本屋の部屋へと入り、そして、再び、古本屋の「裏口」から出て、再び、ソバ屋の「裏口」へと戻つて来た。ただ、犯人は、いわゆる「明智小五郎」ではないのである。

五、明智の推理

さて、いよいよ「明智の推理」であるが、それは、次のようなものである。まず、主人公（私）の「推理」を黙って聞いていたが、やがて、ゲラゲラと笑い出すのであった。そして、いや、失敬と言ひ、君の「考え方」は、なかなか面白いが、しかし、あまりに外面的であり、そして、物質的であると言う。——つまり、明智の「推理」の仕方は、「……僕の方方は、君とは少し違つて、物質的な証拠なんてのは、解釈の仕方ですらにでもなるものである。いちばんいい探偵方法は、心理的に人の心の奥底を見抜くことである。だが、これは探偵自身の能力の問題ですがね。……」と言うのであった。つまり、犯人の「心の中」（つまり「心理」）を深く読むことである。そして、犯人の「心の中」（つまり「心理」）を深く読むことである。それととも、大事なことは、自ら「犯人」となつて、その「犯人」の「内的世界」（つまり「心の中」）を徹底的に生きてみることによつてこそ、初めて、犯人の「心の中」（つまり「心理」）というものを、わが身に感じて、実感として、より深く読み解くことができるようになるのである。……

さて、主人公（私）という人は、殺された「女性」（つまり「古本屋の女房」）と明智小五郎とは、いわゆる「幼馴染み」と聞いていたので、すぐにでも「二人の恋愛関係」を想像してしまつたが、それに対して、明智は、二人に「恋愛関係」が実際にあつたかどうか、また、彼女を現に恨んでいたかどうか、まさに「内面的に心理的に調べましたか」と聞き、そして、彼女とは、小学校へも入らぬ時分に、別れたきりだと言うのである。

次に、「指紋」の問題であるが、明智の「推理」は、古本屋の主人からいろいろ話を聞いていたので、「……ハハハ、笑い話ですよ。誰が消したわけでもなく、電球の線が切れていて、自然と電灯は消え、そして、僕があわてて電灯を動かしたので、一度切れたタングステンがつながつたんですよ。古い電球は、どうもしないでも、ひとりでに切れることがありますがからね」と言うのであった。——つまり、明智の「指紋」をはじめ、主人や女房の「指紋」などが付いていても不思議なことではなく、それ以外の指紋が付いていれば、それが犯人の「指紋」ともなり得るものであるが、電球は、自然と消えたとすれば、犯人の「指紋」は、電球に残るはずもないのである。つまり、犯人の「ソバ屋の主人」という人は、この部屋の「電灯」には、一度もさわつたことがなかつたということである。

また、犯人の着物の「色」についても、例えば、『心理学と犯罪』（その中の「錯覚」や「証人の記憶」という章）などを主人公（私）に読ませて、法廷で、実際、一人の証人は、問題の自動車は、徐行していたと言ひ、そして、もう一人の証人は、早く走つていたと証言している。その他、結局、「……人間の観察や人間の記憶なんて、実にたよりないものですよ。あの晩の学生たちも着物の色を思い違へしたかも知れないし、また、格子のすき間から棒縞の浴衣を思いついた君の着眼は、なかなか面白いが、あまりにおあつらえ向きすぎて、そのような偶然を信じるよりも、僕の潔白を信じてくれないか」と言うのであった。——つまり、われわれ人間の「諸感覚」（つまり「見聞き嗅ぎ味ひ触れ感ること」）などは、その時々々の「状況次第」では実際とは違つて感じられることはいくらもあり得るとともに、その時々々の「記憶」にしても、それほど正確かつ厳密なものではなく、むしろ「曖昧かついい加減なもの」も多くて、それゆえ、確かに、「参考にはなるが、しかし、絶対的なものではない」ということである。

最後に、犯人は、「……一体、どこから入り、そして、どこから逃げたのか」という最大の「難題」であるが、それは、基本的には、主人公（私）の「考え方」と一緒であり、ソバ屋の「裏口」から古本屋の「裏口」へと入り、そして、その「裏口」から、再び、ソバ屋の「裏口」へと戻って来た。ただ違うのは、主人公（私）は、ソバ屋の「主人」に、夜の八時頃、手洗いを借りた人がいたかどうかと尋ねた時に、いましたというような返答をそのまま信じたのに対して、明智の「推理」は、お手洗いを借りた人などいなく、実は、そのソバ屋の「主人」こそは、まさに「真犯人」であるという結論であり、それでは、その「根拠」は、一体、どこにあるのかと問えば、それは、次のようなことである。

まず、明智が注意をひいたのは、「……古本屋の女房のからだには、全身に生傷があり、また、ソバ屋の女房にも生傷がある」ということである。これは、一体、どういうことなのか？ というのも、明智は、彼女らの夫たちといういろいろ話してみると、彼らは、暴力を振るうような、そんな乱暴者ではなく、また、古本屋にしても、ソバ屋にしても、おとなしそうな物わがりのいい男に見えたからである。それでは、なぜ彼女たちのからだには生傷が絶えないのかと考えた時に、ふと「ある考え」が浮かんで来たということである。

そこで、明智は、まず、古本屋の主人に「なぜ夫人には生傷があるのか」と尋ねた時に、古本屋の主人は、非常に躊躇しながらも、やがて「自分がつけた」と認めるのであるが、しかし、それは、いわゆる「暴力」を振るってではなく、むしろ「変態遊戯」のなかでついたものなのである。しかも、ここで最も大事なことは、古本屋の「主人」という人は、それほど本格的な「残虐色情者」ではなく、むしろ「女房」こそは、まさに本格的な「被虐色情者」になっていて、むしろ女房の方がそれを望むようになっていたのである。それゆえ、本格的な「被虐色情者」であった古本屋の「女房」にとっては、夫との「変態遊戯」だけではどこか物足りない、何か満たされない「想い」を抱いていたということである。

一方、明智は、ソバ屋の「主人」ともいろいろ話をしてみるが、彼は、ああ見えてもなかなかしっかりとした男で、それゆえ、探り出すのにもかなり骨が折れたが、しかし、ある「方法」（それは「心理学上の連想診断法」によって、うまく成功したとある。そして、実は、ソバ屋の「主人」こそは、まさに「マルキ・ド・サド」の流れを汲む、本格的な「残虐色情者」であって、それゆえ、ソバ屋の「女房」には、そのからだに生傷が絶えないのである。しかも、ここで最も大事なことは、ソバ屋の「女房」という人は、それほどの本格的な「被虐色情者」ではなかったのであり、それゆえ、本格的な「残虐色情者」であったソバ屋の「主人」にとっては、自分の女房との「変態遊戯」だけではどこか物足りない、何か満たされない「想い」があったということである。

つまり、ソバ屋の「主人」（それは本格的な「残虐色情者」と古本屋の「女房」（それは本格的な「被虐色情者」とは、知らず識らずのうちに、もつと自分を満足させてくれる相手を無意識に「探し求めていた」ということであり、そして、二人がばったりとめぐり逢うことによって、二人の関係は、急速に「親密な仲」になってしまったということである。そして、古本屋の「主人」が夜店に出かけるのを見計らって、夜な夜なソバ屋の「主人」が頻繁にやって来て、いわば「変態遊戯」に耽っていたが、事件のあった日は、その「変態遊戯」に余りに耽り過ぎて、誤って、古本屋の「女房」の首を絞め殺してしまったという事件なのである。それゆえ、ソバ屋の「主人」には、もともと「殺意」というようなものはなかったという結論になるのである。そして、二人が話しているところに、煙草

屋のおかみさんが夕刊を持って来るが、その「夕刊」には、ソバ屋の「主人」が、いわば「罪の意識」（或いは「良心の呵責」）などに耐えられず、自ら警察に「自首」して出たという記事が載っているというところで、「本文」は、終わっているのである。

六、結び

さて、これが江戸川乱歩の『D坂の殺人事件』という作品の内容であるが、その中で、ある「方法」（それは「心理学上の連想診断法」）によって、ソバ屋の「主人」の「心理」を見抜いたとあるので、その部分を『心理試験』という作品ともからめて、少し考えてみたいと思うが、それは、次のようなことである。

まず、『心理試験』という作品であるが、それは、ある「大学生」（ふきやせいしちろう 落屋清一郎）という学生は、まれに見る秀才であったが、いわば苦学生に近く、ある時、ふとしたことから同級生の斉藤勇さいとういさむという学生と親しくなる。そして、その「同級生」（さいとういさむ 斉藤勇）という学生は、六十に近い「官吏の未亡人」の素人屋に部屋を借りていたが、彼の話から、家主の「未亡人」である老婆は、奥座敷の「松の植木鉢」の底に「現金」（大金）を隠しているという情報を得る。そこで、主人公（ふきやせいしちろう 落屋清一郎）という学生は、その「未亡人」（老婆）を殺害して、まさに「松の植木鉢」の底に隠された「現金」（大金）を手に入れようと、半年もかけて、綿密に「計画」を練りに練り上げて、いわば「完全犯罪」を狙って、夜ではなく、敢えて「昼間」に、実際に犯行を「遂行」してしまうのである。……

その時、主人公（ふきやせいしちろう 落屋清一郎）は、なぜか「現金」（大金）をすべて奪わず、現金の「半分」だけを奪い、残り半分は、元の状態に戻し、しかも、その奪った「現金」を縁日で買った新しい「札入れ」に入れて、道で拾ったと警察署に「届け出る」のであった。それは、一年後には、いわば「落し主無し」で自分の「手に入る」と見込んでいるからである。また、「未亡人」（老婆）を手（手袋）で絞め殺した時、「……老婆は、苦しまぎれに空をつかんだ指先が、そこに立ててあった屏風に触れて、少しばかり傷をこしらえてしまう。それは二枚折の時代のついた金屏風で、極彩色の『六歌仙』が描かれたものだ」が、その時は、それほど大した問題にはならないだろうと考えて、老婆の蘇生（生き返り）を恐れて、今度はナイフで胸を刺し、未亡人の家を出た後は、長い時間、公園のベンチに腰かけて、ブランコに乗って遊んでいる子供たちをのどかな顔でながめ、それから、帰りがけに「警察署」（落し物届け）に寄り、そして、自分の下宿の部屋へと帰って来るのであった。

さて、翌日、目覚めて、新聞を読んでみると、同級生の斉藤勇が、何と「身分不相応の大金を所持している」ということで、老婆殺しの「容疑者」として警察に収監されているとある。その「経緯」は、主人公（ふきやせいしちろう 落屋清一郎）による「老婆殺害」後、間もなくして下宿人の斉藤勇が部屋へと帰って来るが、やがて「老婆の死体」を発見する。その時に、ふと「松の植木鉢」の底の「現金」（大金）のことを思い出し、確かめて見ると、お金の包みがあり、それを盗んで「胴巻きの間」に入れたまま、警察に「家主」（老婆）が殺されたと届け出た時、身体検査も同時に受けて、そのまま収監されてしまったらしい。

その後、生前老婆の家に出入りした形跡のある者は、残らず召喚して、綿密に取り調べたが、一人として疑わしい者はなかった。それゆえ、さしずめ最も疑わしい斉藤勇を「犯人」と判断するしかなかった。ところが、一ヶ月後、事件の当日五千二百何十円在中の一

個の「札入れ」が、警察署に届けられていて、しかも、その「拾い主」が、何と容疑者の斉藤勇とは親友の「蒔屋清一郎」ということで、さつそく召喚の手紙を送つては、蒔屋を訊問してみたが、大して得るところがなかったのである。そして、この一ヶ月半のあらゆる捜査の結果、彼ら二人を除いては、一人の容疑者も存在しなかった。そこで、万策尽きた笠森判事という人は、いよいよ奥の手を出す時だと思つて、従来しばしば成功した「心理試験」というものを施そうと決心するのであった。

七、心理試験

さて、その「心理試験」であるが、それは、大きく「二つ」に分類できるものであり、その一つは、純然たる「生理上の反応」によるものであり、それは、犯罪に関連した様々な質問を發して、被験者の身体上の微細な反応を、適当な装置によつて記録するものであり、例えば、いわゆる「うそ発見器」などは、まさに「代表的な装置」であり、具体的には、手の微妙な動き、眼球の動き方の記録、呼吸の変化の記録、脈搏の動きの測定、また、手の平の微細な発汗などによる方法、その他、いろいろあるということである。

そして、もう一つは、言葉を通じて行なわれるものであり、例えば、精神分析家が病人を見る時に用いる「連想診断」というものがあり、それは、ある「言葉」を聞いて、それから連想されるものを「答える」というものである。例えば、「財布」と聞いて、「お金」と答える。また、「殺人」と聞いて、「血」や「ナイフ」と答える。つまり、事件とは全く関係ない「言葉」と、事件と何らかで関連する「言葉」とをうまく組み合わせ、次から次へと「質問」をして、その時の「答え」と「答え方」（微妙な反応の仕方）などを厳密に観察をして、容疑者の「心理」をできるだけ深く探ろうとするものである。

例えば、有名な「刑事コロンボ」なども、犯人に様々な「言葉」を投げかけて、その微妙な「反応の仕方」などを厳密に見極めているのである。そして、「刑事コロンボ」の場合、犯人は、すべて「知能犯」（完全犯罪を狙う人）であり、しかも、最初から犯人が「人を殺す場面」（つまり「殺人現場」）その他などをすべて見せてしまい、最後に、たった一つだけ残して置いた「決定的な証拠」で、犯人を最後「落とす」という手法なのである。この『心理試験』という作品も、たった一つの「証拠」で決着を付けるのである。

さて、主人公（蒔屋清一郎）という人は、いわゆる「心理試験」に備えて、徹底的に練習を積み重ねて、どのような「言葉」に対しても、ためらいも躊躇もなく、ごく自然に反応でき得るように訓練をして、実際の「心理試験」でも、その通りの結果を出すのである。一方、もう一人の「容疑者」（斉藤勇）の場合には、神経過敏なところもあり、ためらいや躊躇などもあり、主人公（蒔屋清一郎）に比べると、すべて「遅い反応」になっている。この「結果」を見る限りは、斉藤勇の方が「疑わしい」ことになるが、笠森判事は、自宅の書齋で、もう一つ「確信が得られない」と思つているところに、ある事件から心易くなつていた何と「明智小五郎」が訪ねて来るのであった。そして、この話は、「D坂の殺人事件」から数年後のことで、彼はもう昔の書生ではなくなつていたとある。

そして、もう一度、主人公（蒔屋清一郎）を「判事の私宅」へと呼び寄せるのだが、それは、「……君を疑つたことをお詫びかたがた、その事情をお話するために、わざわざ来て頂いたわけです」ということで、話もスムーズに進み、いつの間にか時間もたつて、

主人公（ふきやせいちろう 露屋清一郎）が帰り支度をはじめ、「……では、もう失礼しますが、別にご用はないでしょうか」と聞くと、「おお、すっかり忘れてしまふところだった」と、同席していた明智小五郎は、快活に話し始めるが、もちろん、これは、主人公（ふきやせいちろう 露屋清一郎）をすっかり安心させておいて、主人公を「ワナにはめる」ためのお膳立てなのである。そして、「……あの殺人のあった部屋に二枚折りの金屏風きんびょうずが立ててあったのですが、それにちよつと傷がついていたといつて問題になっていふのですよ。ご存じないでしょうか……」といううような感じで話しかけるのであつた。それに対して、主人公（ふきやせいちろう 露屋清一郎）という人は、「……あの部屋に入つたのはたつた一度きりで、しかも、事件の二日前であり、その屏風のことなら覚えていますよ。僕が見た時には確か傷なんかなかつたですよ」と言うのであつた。これは、一体、何のワナを仕掛けたのかと言へば、それは、次のようなことである。

つまり、主人公（ふきやせいちろう 露屋清一郎）という人は、「……事件の二日前に、屏風を見たと言つてゐる」。実際、二日前に老婆の部屋に入つて世間話をしていふのである。それは、一体、何のためかと言へば、それは、斉藤から例の隠し場所を聞いてから、もう半年を過ぎた今、それが当時のままかを確かめるためであり、その方法は、お金を隠しているような噂があるような話をする、彼女の目は、その都度、床の間の植木鉢にそつと注がれ、それを見て、間違いないと確信するのであるが、その日に、屏風を見たと言つていふのである。

ところが、その「屏風」といふのは、実は、「……事件の前日に持ち込まれたものであり、事件の二日前には、その部屋には屏風などなかつた」のである。——つまり、「事件」当日には、確かに「屏風」があり、その「屏風」の小野小町の顔のところ少し傷を付けてしまつたために、そのことがあまりに強く「頭」（印象）に深く残つてしまつたがために、事件の二日前にも、当然のことながら、その部屋に「屏風」はあつたはずだと「錯覚」（勘違い）をしてしまふ、ついつい、「その屏風のことなら覚えていふ」などと軽々しく口走つてしまふ、しかも、主人公（ふきやせいちろう 露屋清一郎）という人は、その「屏風」には、極彩色の『六歌仙』の絵が描かれていふ、とまで言つてしまつたのである。

それでは、なぜ、これが「致命的な失言」となるのかと言へば、それは、「……あの部屋に入つたのはたつた一度きりで、しかも、事件の二日前である」と言つていふ。つまり、事件の二日前と言へば、部屋にはまだ「屏風」などなかつた状態である。そのなかつたはずの「屏風」があつたと言ひ、しかも、その屏風には『六歌仙』の絵が描かれていたなどと、見てもいふのに、どうして言えるのか？ それは、まさに「事件」当日に、その「屏風」を見たからであり、もちろん、見ただけではなく、その「屏風」の小野小町の顔のところ少しばかり傷を付けてしまつたといふあまりにも強い「意識」があつたがために、また、犯人は「さいとういさむね 斉藤勇」で決定といふことで、すっかり気をゆるめてしまひ、いわばうかれ気分、このような「致命的な失言」を生み出す要因になつてしまつたのである。

*

*

江戸川乱歩の世界
屋根裏の散歩者

目次

江戸川乱歩の世界

屋根裏の散歩者

- 一、 素人探偵明智小五郎
- 二、 屋根裏の散歩
- 三、 天井裏うらからの隙見すき
- 四、 覗きとは
- 五、 ツルの恩返し
- 六、 完全犯罪への誘惑
- 七、 犯罪の遂行
- 八、 明智の推理
- 九、 推理の決め手
- 十、 結び

※ 参考文献

江戸川乱歩の世界
屋根裏の散歩者

屋根裏の散歩者

例えば、江戸川乱歩の『屋根裏の散歩者』という作品は、誰もがよく知っている「作品名」であるとともに、映画やテレビドラマなどでも何度か観た経験のある人も非常に多いかと思うが、しかし、実際にその作品を本（書物）で読んでいる人たちは、意外に少ないのではないかと思う。そこで、今回も、本（書物）に書かれた「本文」を丁寧に読み辿りながら、江戸川乱歩の『屋根裏の散歩者』の、「魅力」を探ってみたいと思う。

*

*

まず、本文の「冒頭」部分は、次のようなものである。「……多分それは一種の精神病でもあったのでしよう。郷田三郎は、どんな遊びも、どんな職業も、何をやってみても、いっこうこの世が面白くないのでした。学校を出てから、——その学校とても一年に何日と勘定できるほどしか出席しなかったのですが——彼にできそうな職業は、片っ端からやってみたのです。けれど、これこそ一生を捧げるに足ると思えるようなものには、まだひとつも出くわさないので。おそらく彼を満足させる職業などは、この世に存在しないのかもしれない。長くて一年、短いのは一と月ぐらい、彼は職業から職業へと転々としてしました。そして、とうとう見切りをつけたのか、今では、もう次の職業を探すでもなく、文字通り何もしないで、面白くもないその日その日を送っているのではした」とある。

さて、この「設定」は、江戸川乱歩には実に数多く出て来るものであり、例えば、『赤い部屋』という作品の中でも、「……私という人間は、不思議なほどこの世の中がつまらないのです。生きていることが、もう退屈で退屈でしょうがないのです。そこで、終に見つけ出した遊戯とは、人殺しだったのです。私はその遊戯を発見してから今までに、百人に近い男や女や子供の命を、ただ退屈をまぎらす目的のためばかりに奪ってきたのです」と言う。もちろん、それは、直接的な「人殺し」ではなく、いわば間接的な「人殺し」であり、——例えば、交通事故の現場で、近くに病院はないかと尋ねられた時に、適切な「病院」ではなく、敢えて、故意に遠い加減な「病院」を教えて、その結果、負傷者が手遅れで亡くなってしまおうというようなことである。そのような話を次から次へと話して、最後は、今までの話は、すべて「うそ」だったという展開で終わるわけだが、しかし、そのように何もやることもなく「退屈」で、しかも何か面白いことはないかと飢えに飢えた「心の隙間」に、ふと「悪魔の囁き」が聞こえて来て、何らかの「犯罪的な行為」などに手を染めてしまうようなことは、意外に数多くあるのではないかと思う。

一、素人探偵明智

さて、彼（郷田三郎）は、二十五歳で、親許から月々の仕送りを受け取り、職業を離れても別に生活には困らなかつたのである。そして、彼は、東京の下宿先を頻繁に変えて、今度移ったところは、東栄館という、新築したばかりの、まだ壁に塗り気のあるような、新しい下宿屋でしたとある。それでは、なぜ「新築の下宿屋」なのだろうか？ それは、つまり、「古い屋根裏」というのは、ほこりや蜘蛛の巣、淀んだ空気の臭い、その他、そのようなものが「身体」（衣服や手や足の裏）などに付きまとうとともに、天井板なども、ぎしぎしめりめりと音を出して、とても「天井裏を散歩」して、気楽に楽しめるような環

境ではないのである。そこで、真新しい「新築の屋根裏」であれば、そういう心配もなくなる。そこに、そこで、新しい「楽しみ」を発見することにもなるのである。

ただ、その前に、なぜ、彼（郷田三郎）は、いわゆる「犯罪」に興味を持つようになったのか？ それは、あるカフェで偶然知り合った、素人探偵明智小五郎という人物と親しくなり、彼（明智）の、聡明らしい容貌や、話しっぷりや、身のこなしなどに、すっかり心惹かれてしまい、しばしば彼（明智）を訪ねたり、また、時には彼（明智）の方が三郎の下宿へ遊びに来るような仲になったのである。そして、彼（明智）から様々な「犯罪」についての「話」を聞くうちに、いわゆる「犯罪」というものに興味を持ちはじめ、自分からも「様々な犯罪」などに関する書物などを買い込んで、毎日毎日それを読み耽り、「……ああ、世の中には、まだこんな面白いことがあったのか！」という感じで、本来、世の中のすべての事柄に興味を感じなくなっていた人物であったが、事もあろうに、「犯罪」にだけは、いい知れぬ魅力を感じるようになったということである。

しかも、彼（郷田三郎）は、今度は「犯罪」のまね事を始め、犯罪嗜好者らしく、例えば、浅草の遊園地をはじめ、映画街の狭い路地などを好んで歩いたり、また、その辺の壁に矢の印を書いて廻ったり、金持ちらしい通行人を見かけると、スリにでもなった気で、そのあとを尾行してみたり、また、妙な暗号文を書いた紙きれを公園のベンチの板の間に挟んだり、さらに、例えば、労働者、乞食、学生、その他、特に「女装」が気に入り、町をさまよい歩いては、男たちを翻弄するようなことを喜んでいたが、しかし、ものの三ヶ月もたつと、そのようなことには、やがて厭きてしまい、また、明智との交際も、だんだんと遠のいて行くのであった。……

二、屋根裏の散歩

さて、彼（郷田三郎）が、出来上がったばかりの「東栄館」へと待ちかねて移ったのは、明智との交際を結んでから、すでに一年以上もたっていた。それゆえ、彼（郷田三郎）は、例の「犯罪」のまね事などにも、ほとんど興味を失い、毎日毎日退屈な日々を送っていたのである。それでも、東栄館に移った当初は、新しい友達などができたりして、いくらか気は紛れていたが、しかし、人間という生き物は、なんでも同じような思想（考え）を同じような顔（表情）をして、同じような言葉で繰り返し繰り返し発表し合っているのだろうか。一週間もたたないうちに、彼はまたしても、底知れぬ倦怠の中に沈み込んでしまふのであった。そして、それから十日ほどたった、ある日のことである。

ある日、彼（郷田三郎）は、ふとある妙なことを思いついた。それは、彼の部屋は、二階にあったが、一間ほどの「押入れ」があり、その「押入れ」は、ふつう上下二つに分かれていて、下には、例えば、数個の行李、その他などを納め、一方、上段には、布団などをのせるのがふつうかと思うが、その「布団」を畳んで入れるのではなく、むしろ掛け敷き、そのまま寝られるような状態にしたのである。そうすれば、いちいち「布団」を取り出して、座敷の中央に敷く手間と、また、片付ける手間とが省かれ、寝たくなれば、そのまま上段に上がって寝ればよいという「考え方」である。むろん、この「考え方」が成立するためには、やはり「壁がひどく汚れていたり、蜘蛛の巣が張っていたりした」のでは、そこで寝る気にもならないものであり、それゆえ、どうしても真新しい「新築の下

宿屋」という設定が、ここでも必要不可欠になって来るのである。

さて、そこで寝て見ると、予想以上に感じがよく、低い天井を眺める気持も、どこか異様な味わいがあり、また、隙間から洩れてくる糸のような電気の光を見てみると、自分が何か探偵小説の人物になったような気がしたり、また、それを細めにかけて、自分の部屋を、まるで泥棒が他人の部屋をでも覗くような気分にもなって、興味深かったとある。しかし、それも三日もすると、飽きてしまい、あちこち見たりさわったりしているうちに、ちようど頭の上の一枚の天井板が、釘を打ち忘れたのか、なんだか動くような感じで、手で突っばって持ち上げてみると、動くが、なんとなく上からおさえつけているような手ごたえがあったという。さては、大きな青大将でもいるのかと想像するが、それは、結局、石が置いてあり、天井板を動かしている内に、その石は落ちて来るが、それはよけて、ふと天井裏はどうなっているのかと覗いてみると、縦に長々と横たわる、太くて、曲がりくねった棟木と、その棟木と直角に多くの梁が、両側へ、屋根の傾斜に沿って突き出ている、それを見ては、彼（郷田三郎）は、なぜか「これはすてきだ」と思うのであった。

そうして、彼（郷田三郎）の「天井裏の散歩」が始まるのである。それは、夜となく昼となく、暇さえあれば、彼は泥棒猫のように足音を忍ばせて、棟木や梁の下を伝い歩くのであった。もちろん、新築で汚れる心配もなく、シャツ一枚になって、思うがままに跳梁し、時候もちようど春で、さして暑くも寒くもなかったとある。これらは、やはり「天井裏を自由に散歩」できるための、どうしても「必要な条件」となるのだろう。しかも、その東栄館の建物は、中央の「庭」（つまり中庭）を囲むように、枱形に部屋が並んでいる作りであり、彼の部屋の天井裏から、グルッとひと廻りして、また、元の彼の部屋まで帰って来るようになっていた。そのような設定をして、次へと展開するのである。

そして、一度天井裏に上がってみると、なんとも開放的で、誰の部屋の上を歩き廻ろうとも、まさに「自由自在」であり、しかも、もしその人にその気があれば、盗みを働くことさへできるのである。さらにまた、ここでは他人の秘密を隙見することなどは、もう「勝手次第」であり、新築とは言え、下宿屋の安普請ですから、天井には到る所に隙間があり、希には、節穴さえあるのです。そして、二十人に近い東栄館の二階じゅうの下宿人の秘密を、次から次へと隙見して歩く、そのことだけでも、もう十分愉快なのです。そして、久方ぶりで、彼は、生き甲斐というものを感じさえするのです。とある。

三、天井裏からの隙見

さて 彼（郷田三郎）の身支度は、やがて、さも本ものの犯罪人らしく装い、それは、ピタリと身についた茶色の手織のシャツ、同じズボン下、また、足袋をはき、手袋をはめ、そして、手には懐中電灯を持つというスタイルであり、夜ともなく昼ともなく、こうして、彼は、有頂天になって、「天井裏の散歩」をつづけたのであった。

そして、天井からの隙見というものが、どれほど異様に興味のあるものだから、実際にやってみた人でなければ、恐らく、想像もできません。たとえ、その下に別段の事件が起こっていないなくても、誰も見ているものがないと信じて、その本姓をさらけ出した人間というものを観察するだけでも、充分面白いのです。——ある人々は、そのそばに他人のいる時と、ひとり切りの時とは、立居ふるまいはもろろん、その顔の「相好」（表情）ま

だが、まるで変わるものだと発見して驚くとともに、ふだん横から見ているのとはまた違つて、真上から見下ろすというのは、ずいぶん異様な景色に感じられるものである。

例えば、ふだん過激な反資本主義の議論を吐いている会社員が、誰も見ていない所では、貰ったばかりの昇給の辞令を、折匏おわがぼんから出したり、しまったりして、幾度も飽きずに眺めては喜んでいる光景とか、また、豪華ごうしゃぶりを示している或る相場師が、いざ床につく時には、昼間はさも無造作に着こなしていた着物を、まるで女のように丁寧に畳んだり、また、小さな汚よごれなどを見つけると、丹念に口で舐なめて、クリーニングをしている光景とか、また、何々大学の野球の選手だとかいう青年が、運動家にも似合わない臆病おくびょうさをもつて、女中へのつけ文を、夕食後のお膳の上に、のせたり、引っ込めたり、モジモジと同じことを繰り返している光景とか、さらには、大胆にも、淫売婦風の女性などを引き入れては、すさまじいまでの狂態を演じている光景さへも、見ただけ見ることができなのです。

また、下宿人と下宿人との、感情の葛藤なども、非常に興味深いものであり、例えば、同じ人間が、相手によつて、さまざまに態度をかえて行く有様、今の先まで、笑顔で話し合っていた相手を、隣りの部屋へきては、まるで不倶戴天ふぐたいてんの仇かたきでもあるように罵ののしつている者もあれば、蝙蝠コウモリのように、どこへ行つても、都合のいいお座かたなりを言つて、陰かげでペロリと舌を出している者もあるのです。さらに、二階には一人の女画学生がいるが、それは、もう「三角関係」どころではありません。五角六角と、余りにも複雑になり過ぎた関係、それらが手に取るように見えるばかりか、競争者たちの誰も知らない本人の「真意」というものが、局外者の「屋根裏の散歩者」だけには、ハッキリとわかるのであった。

四、覗きとは

さて、それでは、その「覗き」という問題を考えてみたいと思うが、まず、「覗き」というのは、一体、何かと敢えて問えば、それは、まさにわれわれ人間の「好奇心」そのものに他ならないのである。しかも、それは、堂々と見るというよりは、むしろ「こっそりと見る」ということであり、それでは、なぜ「こっそりと見る」のだろうか？ それは、自分の存在を気づかれないようにして、まさにできるだけ「対象」をそのまま（あるがまま）に見てみたいという「好奇心」に他ならないのである。

例えば、人間、動物、植物、自然、人工物、宇宙、その他、何であれ、まさにできるだけ対象をそのまま（あるがまま）に見てみたいという「好奇心」であり、その対象が「人間」であるような場合は、例えば、われわれ人間というのは、他人の前ではどうしても他人を意識した「姿」（言動）などになりやすい傾向があるかと思うが、それゆえ、そのような他人を全く意識しない、その人の、まさに素のまま（あるがまま）の「姿」（言動）などを見てみたいという、そういう「一つの欲求」でもあるということである。

また、女性の部屋をはじめ、女性の風呂場、トイレ、更衣室、その他、そのようなところへの「覗き」も、極めて多いかと思うが、それらに加えて、他人の部屋、ダンスや引出しの中、日記、手紙、写真、その他をはじめ、パソコン、ケータイ、スマホ、その他の中を覗いてみたり、また、何らかの「秘密の情報や極秘文書、その他」などを覗いてみたりと、その他、実に多種多様なものがあるかと思うが、それらを一言で言えば、ほんとうのことが知りたい、その「実体」（ほんとうのこと、ほんとうの姿、ほんとうの生體、ほん

とうの事情、ほんとうの状況、ほんとうの心、その他)、ほんとうの何かが知りたいという、そういう「好奇心」でもあるということである。

*

*

そして、「覗き」という行為は、当然のことながら、「する」側と「される」側とに大別されるかと思うが、「する」側は、面白い、楽しい、興味深い、その他ということになるかと思うが、しかし、一方、「される」側は、いやだ、恥ずかしい、許せない、プライバシーの侵害だ、その他、そういうことになるのだろう。——これは、常に、一方には、「する」側と、もう一方には、「される」側とが同時に存在することになる。そして、一方の「する」側というのは、例えば、面白い、楽しいということになるのかも知れないが、一方、「される側」は、例えば、いやだ、許せない、プライバシーの侵害だ、その他ということになるのだろう。このことは、徹底的に考えてみなければならぬことであり、「する」側は、よくても、「される」側は、それで、はたまったものではないのである。これは、すべての「犯罪行為」(或いは「不正行為」)などについて言えることである。

例えば、人を「殺す」方はよくても、「殺される」方はたまったものではない。また、物を「盗む」方はよくても、「盗まれる」方はたまったものではない。また、「詐欺」する方はよくても、「詐欺」される方はたまったものではない。また、人を「恐喝」(罵倒)する方はよくても、「恐喝」(罵倒)される方はたまったものではない。また、「横領」する方はよくても、家に「放火」される方はたまったものではない。また、「横領」する方はよくても、「横領」される方はたまったものではない。また、「強姦」する方はよくても、「強姦」される方はたまったものではない。その他、それらは、すべて同じことである。——だからこそ、それらを「犯罪」(或いは「不正行為」)として罰するとう、そういう「法律(刑法)、その他」になっているのである。

五、ツルの恩返し

ところで、「覗き」という言葉を聞いて、誰もが「頭の中」(或いは「心の中」)にふと思ひ浮かべる「イメージ」の一つとしては、日本では余りにも有名な『鶴の恩返し』という昔話があるかと思うが、その「内容」は、次のようなものである。

*

*

むかしむかし、あるところに、おじいさんとおばあさんが住んでいました。ある寒い冬の日、おじいさんは町へたぎぎを売りに出かけました。すると途中の田んぼの中で、一羽のツルがワナにかかっているのを見かけました。おじいさんは可哀想に思っ、ツルを助けてやりました。するとツルは、「カウ、カウ、カウ」と、鳴いて、飛んで行きました。その夜、雪の降る中、戸を叩く音がしました。戸を開けると、娘が一人立っていて、道に迷い、行くあてもなく、一晩泊めてください、と頼むのであった。老夫婦は、喜んで娘を泊めてやりました。翌日から、娘は、せつせと食事の手伝いや掃除などをしました。何日も外の大雪は降り止まず、娘は、やがて、この家においてくださいと頼むのであった。

そして、ある日、娘は、機を織りたいので、糸を買って来てくださいと、おじいさんに頼みました。おじいさんは、町で糸を買ってくると、娘は、「機をおっている間は、決して中をのぞかないください」と頼みました。三日後、娘は、美しい「布」(織物)を持

って、外に出て来ました。娘は、この「布」（織物）を町に持って行って売り、帰りにはまた、糸を買って来て下さいと言うのであった。

娘は、再び、部屋で機を織りはじめ、三日後に、美しい「布」（織物）を持って、外に出て来ました。その「布」（織物）は、町では評判となり、高い値段で売れました。そして、また、娘は、部屋に閉じこもって機を織り始めると、おじいさんとおばんさんは、一体、どのように機を織っているのかという「好奇心」と、次第に痩せてきた娘を「心配」して、終に、覗いてはいけないと言われていた、その「部屋のなか」をそっと覗いてしまったのでした。すると、そこには、一人の娘ではなく、「……一羽のツルが長くちびしで自分の羽毛を引き抜いては、糸には喜んで機をおっていた」のでした。娘は、「……わたしは、いつか助けられたツルでございます。正体を見られては、ここに留まることはできません。もうお別れです」と、おじいさんとおばあさんが止めるのも聞かず、娘は、一羽のツルとなって空高くへと舞い上がって行くのでした。……

*

*

さて、これが有名な『鶴の恩返し』であるが、これは、一体、何なのか？ それは、基本的には、まさに「因果応報」ということであり、「……善いことをすれば、善い結果がわが身に降りかかり、悪いことをすれば、悪い結果がわが身に降りかかる」ということである。——つまり、ツルを助けてやったからこそ、ツルは、その恩返しに来たのであり、一方、覗いてはいけないという約束を破ったから、ツルは、出て行ってしまったのである。

また、浦島太郎は、いじめられていたカメを助けたからこそ、カメは、その恩返しに竜宮城へと連れて行くのであり、一方、開けてはいけないという玉手箱を開けてしまったからこそ、まさに「おじいさん」（厳しい現実社会へと戻る）ことになるのである。

もちろん、その他の「笠地蔵、花咲かじいさん、舌切りすずめ、その他」なども、基本的には、同じような「因果応報」に基づいた内容になっているかと思う。

一方、桃太郎というのは、川でおばあさんに桃として拾われ、その後、子供のなかった老夫婦に大事に育てられます。そして、大きくなると、桃太郎は、鬼退治を思い立ちますが、それは、鬼は人の物を盗んだりして迷惑をかけていた存在であり、その「鬼退治」に行く日、おばあさんは、日本一のきみだんごを作って持たせます。そして、その「鬼退治」に行く途中で、まず、イヌ（忠誠）が現われて、お腰の「きみだんご」を一つくださいと言い、そこで、桃太郎は、イヌにきみだんごを一つあげると、イヌは、一緒について来る。次に、サル（智慧）が現われ、最後は、キジ（勇氣）が現われ、同じようにきみだんごをもらって、一緒について来る。これは、一体、何なのかと問えば、それは、まさに「鬼退治ときみだんご」とを媒介としての、いわば「人間関係」の最も基本的な形なのである。

例えば、「会社」と「社員」との関係は、一方の「社員」の方は、会社の仕事をしない、それに対して、一方の「会社側」の方は、その「報酬」（見返り）として「給料」（お金）を支払うという関係である。——さて、鬼ヶ島に着くと、まず、キジが鬼の様子を空から見、また、サルは高い門をよじ登って行き、門のかんぬきを抜き、そして、イヌや桃太郎は、門を押し開けて、中に入ると、多くの鬼たちが襲って来ます。しかし、日本一のきみ団子を食べて百人力になっていたイヌ、サル、キジ、桃太郎たちは、多くの鬼たちをこらしめ、ついに降参させます。そして、盗まれた宝物などを持って、村へと帰ってくるという話である。これはもちろん、まさに「勸善懲惡」であるが、それでは、なぜわれわれ人

間は、このような「勸善懲悪」を好むのだろうか？ それは、われわれ人間の「知性や理性」というものが、まさにそういうものを好む特徴（性質）を持っているからである。

そして、その「……善いことをすれば、善い結果がわが身に降りかかり、悪いことをすれば、悪い結果がわが身に降りかかる」という「考え方」は、一体、どこから生じて来るのかと敢えて問えば、それはもちろん、われわれ人間の「理知的部分」（それは「知性＋理性＋母体のようなもの」から成るもの）ではあるが、その最も「根源」そのものは、まさに「母体のようなもの」（その内に宿る「善のDNA」）からということになるのだろう。

六、完全犯罪への誘惑

さて、或る夜ふけのこと、三郎は、いつものように「散歩」を一巡して、自分の部屋へと帰るために、梁から梁を伝わっていたが、彼の部屋とは、庭を隔てて、ちょうど向かい側の、一方の隅の天井に、ふと、かすかな隙間（明かり）を発見する。それは、かなり大きな「木の節」で、半分以上板から離れて、ちよつとこじ開ければ、なんなく離れそうなので、三郎は、部屋の人が寝ていることを確かめた上で、音がしないようにそれをそうつとはがし、また、それを元にもどせば、節穴がふさがるような状態にしたのでした。

そして、その節穴から下を覗いてみると、偶然にも、東栄館のなかでも、いちばん虫の好かぬ、遠藤という歯科学校卒業生で、今はどこかの歯医者（は）の助手をしている男の部屋であり、その江藤が、のつぺりとした顔で、すぐ目の下に寝ているのでした。ばかに几帳面と見えて、部屋の中は、すべてキチンと整頓されている。ただ、それにふさわしくないのは、大きな口をあけて、いびきをかいていることである。その寝顔を見ているうち、ふと妙なことを思いつき、そこで、猿股（さるまた）のひもを抜き出して、それを節穴の上から垂らすと、ちよつと遠藤の口のところに当たるのでした。三郎は、節穴を塞いで、立ち去ろうとしたが、その時、ふと「恐ろしい考え」が閃くのであった。それは、何の恨みもない遠藤を殺害するというものであり、自分でもぞつとして身震いするのであった。

ただ、彼（郷田三郎）という人は、非常に変態的で、犯罪嗜好（こうざいこう）ともいうべき病気を持っていて、その犯罪の中でも彼が最も魅力を感じるの「殺人罪」であり、しかも、絶対に犯行がバレないような「完全犯罪」ともなれば、ならさらのことなのである。

それは、東栄館へ引越して四、五日たった頃、三郎は、ある同居人と近くのカフェに行くとき、そこに遠藤も来ていて、そこで三人で酒（三郎は嫌いで飲まず）やコーヒーを飲んだ後、三人で東栄館へと戻るが、その時、酒に酔っていた遠藤は、自分の部屋へと二人を誘い、そして、酒に酔った勢いで、自分は、実は「ある女性と情死しかけたことがある」と言い、そして、押入れの「行李」の中から、その時に使い残したモルヒネの「小さな瓶」を見せるのであった。そのことを想い出した三郎は、その「モルヒネ」を使って、天井からその「毒薬」を垂らせば、まさに「完全犯罪」も可能だと考えるのであった。

そこで、四、五日後、彼（郷田三郎）は、遠藤の部屋を訪ねては、遠藤が便所へと行くチャンス（チャンス）をひたすら狙い、ようやく、夜の十時頃、便所に立った後、すぐに押入れの「行李」の中から、例のモルヒネの入った「小さな瓶」をまんまと手に入れては、自分の部屋へと帰って来るのであった。そして、深夜、孤独、そのモルヒネの「小さな瓶」の中に砂糖少

量とマッチ棒に浸したアルコールを一滴一滴と垂らして調査し、まさに「毒薬」を作り出すのであった。それを持って、毎日、いわゆる「屋根裏の散歩」をすることになるが、主人公（郷田三郎）は、ふと自分の「計画」にある決定的な「ミス」（欠陥）があることに気づいたのであった。それは、この前は、偶然にも天井の「節穴」の真下に遠藤の「口」があったが、いつもそのような状態になるはずもなく、自分の愚かさに気づいて、非常に失望したり、また、これで殺人罪を犯さずにすんだと安堵したりするが、しかし、彼はなお未練たらしく、例の節穴をあけては、遠藤の様子をチェックすることを怠らなかつただけではなく、いつか前と全く同じような状態になることを心密かに願っていたのである。

七、犯罪の遂行

そして、ある夜のこと、三郎は、またしても遠藤の部屋の屋根裏をうろついでいて、今日こそは、どうか吉が出てくれますようにと、神に念じさえしながら、例の節穴をあけてみると、なんといつか見た時と全く同じような状態になっている。そこで、猿股の紐を抜いて、確かめてみても、まさに「穴と紐と口」とが、正しく「一直線上」にあるのでした。彼は、思わず叫びそうになったが、やっとこらえて、遂にその時が来た「喜び」と、一方では言い知れぬ「恐怖」とが交錯をして、一種異様の「興奮」のために、彼の顔は、真っ青になっていった。そして、「……彼はポケットから、毒薬の瓶を取り出すと、独りで地震出す手先を、じっとためながら、その栓を抜き、紐で見当をつけておいて、ポトリ、ポトリ、ポトリ、と十数滴、下に落として、それがやっとでした」とある。

一方、下で寝ている遠藤は、口をムニヤムニヤと動かしたり、両手で口をぬぐったり、また、何度も寝返りなどをうちながら、大声を發して苦しみ叫ぶでもなく、やがて、大きなびきをかいてから、しだいに静かになって動かなくなるのでした。（細かな描写省略）、主人公（郷田三郎）は、人殺しなんてこんなあつけないものかと、なんだかがツカリしながらも、まだ十数滴残っている「小さな瓶」を下に抛り落として、まさに「自殺」に見せかけるのでした。そうして、節穴をふさいで、天井裏に何か痕跡を残していないか懐中電灯で確かめてから、主人公（郷田三郎）は、自分の部屋へと戻って来るのであった。

そして、彼は、自分の部屋の「押入れ」の中で着物を着はじめるが、ふと猿股の「紐」は、どうしたかと想い出して、どこかに置き忘れて来たかと不安になり、あわてて体じゅうを両手でさがしまわるが、シャツのポケットに入っているのを見つけてほっとするのであった。ところが、そのポケットにはもう一つ毒薬の瓶の「コルクの栓」も一緒に入っていて、仕方なく、再び、屋根裏に戻って、遠藤の天井裏の「節穴」から、その「栓」を下に落とすのであった。そして、主人公（郷田三郎）が床に付いたのは、午前三時頃であったが、まだ何か抜かりはないかと、その晩の行動を一つ一つ想い出しては確認をして、もう何もないだろうというようにして、夜が明けるまで考え続けていたのでした。

やがて、早起きの下宿人たちが、洗面所へ通るために廊下を歩く足音が聞こえて来ると、主人公（郷田三郎）は、あわてて外出の準備をはじめるが、それは、遠藤の死体が発見されるのを恐れて、そのあいだは外出しているのがいちばん安全と考えたが、朝飯も食べずに外出するのは、逆におかしいと考え直して、二時間ほどビクビクした気持ちで床の中にいてから、朝食を急いで食べては、下宿屋を出て、それからどこへいくという当てもなく、

ただ時間をつぶすためだけに、町から町へとさまよい歩くのであった。

そして、主人公（郷田三郎）が昼ごろに外から帰って来ると、すでに遠藤の死体はかたづけられていて、警察の臨検もすっかりすんでいたが、聞けば、遠藤は、失恋か何かを苦にして、恐らく、自殺したのだろうと、誰もが彼の「自殺」を疑うような気配はなかったというような展開で、いよいよ素人探偵「明智小五郎」の登場になるのである。

八、明智の推理

さて、明智小五郎が、主人公（郷田三郎）のところにやって来るのは、遠藤が死んでから三日目のことであった。それは、夕食をすませて、ゆったりとしているところに、ひよっこりと現われて、「やあ」、「ごふさた」というような感じで、お互いに挨拶をし合い、明智は、「……この下宿で毒を飲んで死んだ人があるっていうじゃないか」と言うと、「……ああ、モルヒネだね、僕はその時いかなかったが、どうも痴情の結果らしいのだ」と応えるのであった。——とここで、「推理小説」には、必ず、「隠し球」（いわば「決め手」というものがあり、まさにその決定的な「証拠」を相手（犯人）に突きつけると、相手（犯人）は、ついに観念して「犯行を認める」というようなものである。

そして、この「小説」にも、当然のことながら、まさに「二つの隠し球」が用意されているが、それは、最初から終盤まで「完全に伏されているもの」であり、犯人も（読者も）、それを全く知らないのである。そして、例えば、明智なら明智が、最後に、相手（犯人）を追い詰めていく時に、初めて、まさに「登場して来る」ものであり、それまでは、相手（犯人）は、自分の「犯行」には絶対的な「自信」を持っていて、絶対にバレるはずはないと思っているわけである。ところが、その決定的な「隠し球」（いわば「決め手」）を突きつけられると、相手（犯人）は、一気に「心が動揺して」きて、まさに「絶対的な自信」がたがたと音を立てて崩れはじめ、そして、最後には「犯行を認める」ような展開へとなっていくが、むろん、その場面こそは、まさに一番の「見せ場」になるのである。

さて、明智は、遠藤とは「いったいどんな男なんだい」と聞くと、主人公（郷田三郎）は、いろいろと説明しながらも、明智をちよつとからかってやろうという気持ちにさえなつて、「……君はどう思うね、ひよつとしたら、これは他殺じゃあるまいか」などと言うつたりするが、それに対して、明智は、「……それはなんとも言えないね。……どうだろう、その遠藤君の部屋を見るわけにはいくまいか」と聞くと、「造作ないよ」、「……隣の部屋に遠藤の同郷の友だちがいて、（有名な）君のことを話せば、きつと喜んで見せてくれるよ」というようなことで、やがて三人で遠藤の「部屋」へと入ることになるが、その遠藤の友だちというのは、北村といって、遠藤の（部屋の管理や）失恋を証言した男でもあり、明智は、遠藤の部屋の中をあちこち見まわしていたが、ふと机の上に置いてある目覚まし時計に気づくのであった。そして、「これは目覚まし時計ですね」と言うと、次こそ、まさに「隠し球」の一つであるが、北村は、「そうですね」、「……遠藤の自慢の品です。あれは几帳面な男でしてね、朝の六時に鳴るように、毎晩欠かさずこれを巻いておくのです。私なんかいつも、隣の部屋のベルの音で眼をさましていたくらいです。遠藤の死んだ日だってそうですよ。あの朝もやっぱりこれが鳴っていました」と言うのである。

まず、遠藤は、几帳面な男であった。この「設定」は、まさに「絶対条件」であり、仮

に「いいかげんな性格」であれば、いつもきっちりとした「同じ場所(位置)」で寝るようなこともないだろうし、また、朝の六時に鳴るように、毎晩欠かさずに目覚まし時計のねじを巻いておくことも、成り立たないことになってしまふからである。そこで、明智は、「あの朝、目覚まし時計が鳴ったことは間違いないでしょうね」と、念を押して聞いている。それは、まさに「決定的な決め手」の一つとなり得るからである。なぜなら、これから「自殺を図ろう」と決心している人が、わざわざ目覚まし時計のねじなど巻くものだろうかという問題である。もちろん、毎日の習慣でほとんど無意識的に巻いてしまったという可能性も残るので、これだけではまだ不十分なのである。それゆえ、もう一つの「隠し球」(いわば「決め手」)がどうしても必要不可欠になって来るとともに、それは、最後の最後まで取って置くという「手法」になっているのである。そして、このことは、主人公(郷田三郎)にとつては、まるで足許の地盤が不意に崩れ始めたような驚きを感じた、とある。

一方、明智は、いつそう綿密に部屋の中を調べはじめたが、それはもちろん、天井も見逃すはずはなく、天井板一枚一枚を叩いてみて、人間の出入りした形跡はないかを調べまわったが、これという新たな発見もなく、遠藤の部屋を出ては、再び、三郎の部屋に戻り、しばらく雑談をするが、その中にこそ、まさに第二の「隠し球」(いわば「決め手」)となるヒントが隠されているのである。それは、次のような内容である。つまり、明智は、袂から煙草を取り出して、それに火をつけて吸い始めるのだが、その時に、「……君はさつきから、ちっとも煙草を吸わないね、よしたのかい」と聞かれて、三郎は、「……おかしいね、すっかり忘れていたんだ。君が吸っていても少しもほしくならない」のだと言う。あれほど大好きだった煙草を、「いつから？」と聞かれると、「……もう二、三日吸わないようだ」と、三郎にもその理由がよく分からない状態であり、明智は、「……じゃあ、ちようど遠藤君の死んだ日からだ」と言うのであった。もちろん、それには、当然のことながら、深い理由がはつきりとあるのだが、それこそ、まさに第二の「隠し球」(いわば「決め手」)となるものである。やがて、明智は、何事もなく帰って行くのであった。

九、推理の決め手

さて、明智がその「姿」を再び主人公(郷田三郎)の前に見せるのは、それから半月ばかり経った後であり、その間は、言うまでもなく、ずっと「推理と捜査」などをし続けていて、そして、ついにその「推理の結論」が出たからこそ、再び、その「姿」を現わすという展開になるのである。一方、そのあいだ、主人公(郷田三郎)は、例の目覚まし時計のことなどが気になっていたが、しかし、たとえ遠藤が「自殺」ではなく、まさに「他殺」だとしても、自分の犯行だという「証拠」など何一つ残していないのだから、そんなに心配することもないかと思いつつも、しかし、相手が名探偵「明智小五郎」だけに、なかなか安心はできずにいたが、半月もその「姿」を自分の前に見せないで、「やれやれ、これでいよいよおしまいか」と、ついに気を許すようになっていたのである。そして、犯行以降は、今まで興味を感じなかった色々な遊びが、不思議と面白くなって来たのである。

さて、ある日のこと、外から夜の十時頃に「自分の部屋」へと帰ってきて、さて寝ようかと、布団を出すために、押入れの襖をあけた途端に、突然、天井から死んだ遠藤の首が髪を振り乱して逆さまにぶら下がっているのを見て、主人公(郷田三郎)は、思わず「わ

っ」と大声で叫んで、二、三步、後ずさりして、入り口まで逃げるが、再び、確かめに戻ってきて、押入れの中を覗いて見ると、今度は、その首がいきなりニコリと笑うのであった。もちろん、それは、明智小五郎であるが、「ちよつと君のまねをしてみたのだよ」と言うのであった。——つまり、明智小五郎も、まさに「屋根裏の散歩」を実際に何回も行って、そして、遠藤の「天井裏」に、この「ボタン」（それは「三郎が今着ているシャツのボタン」）が一つ落ちていたなどという、まさに「大ウソ」（実際はボタン屋で買って来たもの）を見せて、主人公（郷田三郎）の驚く「反応」（度肝を抜かれた様子）などを確かめ見極めようとしているのである。そして、「君が殺したのではないのかね、遠藤君を」という言葉に対して、主人公（郷田三郎）は、もうだめだと思うのであった。

それは、最初、何の前ぶれもなく、まさに完全に安心しきっていた「心の状態」の時に、何気なく押入りの襖を開けた途端、突然として、死んだ遠藤の首が髪を振り乱して逆さまにぶら下がっているのを見た時には、さすがの主人公（郷田三郎）も、まさに「度肝を抜かれてしまった」とともに、それに加えて、遠藤の「天井裏」に何と自分のシャツの「ボタン」が一つ落ちていたなどと、まさに自分の目の前にその具体的な証拠まで突きつけられるという、これらの明智の巧みな「トリック」（つまり「人をだます仕掛け」）によって、主人公（郷田三郎）という人は、完全に打ちのめされてしまつて、もう明智と戦つて反論するというような気力さえ奪われてしまつたのである。

そして、いわゆる「主人公」（郷田三郎）こそは、真犯人である、という「結論」を出すまでの、まさに「推理の経緯」については、次のように語っているのである。

まず、明智小五郎が、最初に遠藤の「自殺」に疑問を抱いたのは、やはり例の「目覚まし時計」からであり、そこで、「……管轄の警察署を訪ねては、その現場を臨検した一人の刑事から、当時の模様を詳しく聞くことができた」とある。その話によると、「……モルヒネの瓶が、煙草の箱の中ころがっていて、中身が巻煙草にこぼれかかっていたというのである。……そこで、ふと気づいたのは、主人公（郷田三郎）が遠藤の死んだ日から煙草を吸わなくなっている」ということであつた。そこで、半月前から、明智は、たびたびこの下宿屋にやつて来ては、主人公（郷田三郎）に知られないように「遠藤の部屋」を調べていたとともに、いわゆる「屋根裏の散歩」によつて、下宿人の様子などもさぐることにしたが、特に主人公（郷田三郎）の部屋の上では、たびたび長くうずくまっていた、彼のイライラする様子なども上から隙見していたと言うのである。そして、さぐればさぐるほど君が疑わしくなるが、しかし、これという「確証」が何一つないので、仕方なく、あのような「お芝居」をしたと言うのである。——つまり、主人公（郷田三郎）のその「驚く姿」（反応の仕方）を見て、まさに「真犯人であるという確証を得た」ということである。一方、主人公（郷田三郎）という人は、やがて、「自首」を覚悟するのであつた。

そして、『屋根裏の散歩者』という作品の「本文」の最後は、次のような「文章」で終わっている。それは、「……彼は毒菓の瓶を節穴から下に落とした時、それがどこへ落ちたかを見なかつたように思っていたが、しかし、その実は、巻煙草に毒菓のこぼれたことまで、ちゃんと見ていて、それが意識下に押し込められて、心理的に彼を煙草嫌いにさせてしまった」という結論になるのである。そして、これこそは、まさに第二の「隠し球」であるとともに、まさに事件解決の「決め手」ともなっているものである。

十、結び

例えば、前述の『心理試験』という作品の中にも、当然のことながら、いわゆる「推理小説」である限りは、必ず、「隠し球」（いわば「決め手」）というものが用意されていて、まさにその決定的な「証拠」を相手（犯人）に突きつけると、相手（犯人）は、ついに観念して「犯行を認める」というようなものである。それは、一体、どういうものだったかと問えば、それは、次のようなものである。——つまり、苦学生の主人公（ふみやせいじちろう 落屋清一郎）という大学生は、「……事件の二日前に、屏風を見たと言っている」のである。実際、二日前に老婆の部屋に入って世間話をしているのである。それは、一体、何のためかと言えば、それは、斉藤から例の隠し場所を聞いてから、もう半年を過ぎた今、それが当時のままかを確かめるためであり、その方法は、お金を隠しているような噂があるような話をすると、彼女（老婆）の目は、その都度、床の間の植木鉢にそっと注がれ、それを見て、間違いないと確信するのであるが、その日に、屏風を見たと言っているのである。

ところが、その「屏風」というのは、実は、「……事件の前日に持ち込まれたものであり、事件の二日前には、その部屋には屏風などなかった」のである。——つまり、「事件」当日には、確かに「屏風」があり、その「屏風」の小野小町の顔のところに少し傷を付けてしまったために、そのことがあまりに強く「頭」（印象）に深く残ってしまったがために、事件の二日前にも、当然のことながら、その部屋に「屏風」はあったはずだと「錯覚」（勘違い）をしてしまい、ついつい「その屏風のことなら覚えていいる」などと軽々しく口走ってしまった、しかも、主人公（ふみやせいじちろう 落屋清一郎）という人は、その「屏風」には、極彩色の『六歌仙』の絵が描かれている、とまで言ってしまったのである。

それでは、なぜ、これが「致命的な失言」となるのかと言えば、それは、「……あの部屋に入ったのはたつた一度きりで、しかも、事件の二日前である」と言っている。つまり、事件の二日前と言えば、部屋にはまだ「屏風」などなかった状態である。そのなかったはずの「屏風」があったと言い、しかも、その屏風には『六歌仙』の絵が描かれていたなどと、見てもいないのに、どうして言えるのか？ それは、まさに「事件」当日に、その「屏風」を見たからであり、もちろん、見ただけではなく、その「屏風」の小野小町の顔のところに少しばかり傷を付けてしまったというあまりにも強い「意識」があったがために、また、犯人は「さいとうゆうむ 斉藤勇」で決定ということ、すっかり気をゆるめてしまい、いわばうかれ気分、このような「致命的な失言」を生み出す要因になってしまったのである。

*

*

つまり、それは、最初から終盤まで「完全に伏されているもの」であり、作者以外、誰も、犯人も（読者も）、そのことを全く知らないものである。そして、例えば、明智なら明智が、最後に、相手（犯人）を追い詰めていく時に、初めて、まさに「登場して来る」ものであり、それまでは、相手（犯人）は、自分の「犯行」には絶対的な「自信」を持っていて、絶対にバレるはずはないと思っているのである。——ところが、その決定的な「隠し球」（いわば「決め手」）を突きつけられると、相手（犯人）は、一気に「心が動揺して」きて、まさに「絶対的な自信」ががたがたと音を立てて崩れはじめ、そして、最後には「犯行を認める」ような展開へとなっていくとともに、その場面展開こそは、まさに「推理小説」の一番の「見せ場」にもなっていくのである。

*

*

例えば、有名な『刑事コロンボ』の場合にも、基本的には全く同じことであり、犯人は、すべて「知能犯」（完全犯罪を狙う人）であり、しかも、最初から犯人が「人を殺す場面」とその後の「推移」その他などもすべて（九十九%まで）見せてしまい、最後に、たった一つだけ残して置いた「決定的な証拠」（残りの1%だけ）を以って、犯人を最後追い詰める、そして、終に「落とす」という手法なのである。その一つの例として、記憶は極めて不確かであるが、確か次のような内容の作品があったかと思う。——それは、まず、完全犯罪を狙う犯人は、相手をおかしくする「密室」へと閉じ込めてしまうのである。その「部屋」というのは、（例えば、銀行の何か金庫室のような部屋で）、内からは絶対に外に出られないような「完全なる密室」という設定なのである。そして、その「完全なる密室」に閉じ込められてしまった人は、土、日は、会社は休みなので、誰も助ける人もなく、やがて「酸欠」で死んでしまうのである。そして、月曜日になって、その「完全なる密室」を開けると、そこには閉じ込められていた人が床に倒れて死んでいるのである。彼をずっと捜していた刑事コロンボをはじめ、それを見た人たちはみな、彼は誤って密室に閉じ込められてしまい、内から外に出られずに死んでしまったのだと、まさに誰もが「事故死」だと思いつ込んでしまい、そこに茫然と立ち尽くすばかりとなることもに、そこに居合わせていた犯人も、これで「完全犯罪」が成立したとニンマリと微笑むのである。……

そして、カメラは、床に倒れている人に近づいていき、最後は顔をアップに撮って、確かに死んでいることを確かめるのである。それから、カメラは、ずっと引いて、今度は、右側の方の白い壁を映し出すのである。最初は、何も無いが、ゆっくりとカメラを右側へと移動していくと、その白い壁に何か「傷か汚れ」のようなものが付いている。あれは一体何だろうという感じで、カメラは、ゆっくりとその「傷か汚れ」のように見えるものと近づいていくと、そこには何と死んだ人が死ぬ前に書いた「ダイニング・メッセージ」が書いてあり、それは、もう助からないと覚悟を決めた時に、自らの手首を切って、その真っ赤な血を使って指で書いた文字であり、「……私は、誰々に閉じ込められて、殺された」と書いてあるのである。そして、ドラマは、この場面で音楽が流れて終わるのである。つまり、最後の最後になって、初めて、誰一人知らない、とっておきの「隠し球」（つまり「決め手」）が登場して来るといって典型的な例になるのである。

*

*

「参考文献」

※底本「屋根裏の散歩者」江戸川乱歩著（「青空文庫」）

※底本「江戸川乱歩傑作選」（「新潮文庫」）